井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話を聴く（三）

聞き手　狩野　啓子（久留米大学文学部国際文化学科）
筆録・編集　大庭　卓也（　同　）

後継者の問題

狩野　次に後継者の問題については、いかがでしょうか。

井上　当然、二十代の若い人に技術を継承してもらうのが一番良いです。けれども、残念ながら若い人は雇えないんです。その理由は結局、賃金です。普通の小さな企業に勤めてもらえるぐらいの給料がなかなか払えない。ですから当社では、今まで全く別の仕事をしてこられて、退職した六十歳以上の方々を、国の特定求職者雇用開発助成金を利用して、人件費を軽減しながら採用しております。いまそうした方が三人来て下さって、製作歴五十年以上の職人の指導のもとに、どうにか製造しています。

狩野　やはり女性が多いのですか。

井上　いえ、女性は一人、あとの二人は男性です。

狩野　どのくらいで仕事ができるようになりますか。

井上　籃胎漆器製作の工程には、まあ、ひと月ぐらいでできるようになる仕事もあれば、少なくとも半年とか、五年とかの修行が必要な仕事、それ以上の経験が必要な仕事もあります。だから、手伝いに来てもらっている方々には、簡単な仕事から始めてもらっています。

狩野　皮肉な言い方になりますが、仕事を退職した方のほうが向いているとも言えますかね。給料の面から言っても。年金でいちおうの生活の基盤はできているから。

井上　そうですね。六十五歳から年金を満額もらえますからね。

狩野　では、行政による後継者育成に関する助成のようなものは、受けたくないということですか。

井上　いや、そんな助成があれば、喉から手が出るほど欲しいですよ。しかし、若い人を採用、育成する場合、会社がせめて十年、二十年は存続し、生計が成り立つ見通しがつかないといけない。もし助成があったとしても、抱えている問題が多すぎて、すぐには利用できない状態――。

狩野　ただ国としても、やっぱり伝統文化はしっかり守ってゆかなくてはならないから、助成というのはありますでしょう。

井上　自治体によっては、伝統工芸の技術の伝承や後継者育成の支援を積極的に行っているところもあるようですが、私どもが必要としている部分に久留米市の援助は届いておりません。久留米市の観光ウェブページへの掲載など、後方支援のようなものはありますが、必要としているのは実効性のある支援です。

狩野　福岡県からも予算はないのですか。

井上　はい、ないですね。県の商工部は色々よくして下さるんですが。京都なんかは、やはり伝統工芸が経済のひとつの柱となっていますから、後継者育成をはじめ、いろんなことに行政の助成があるようですね。

狩野　後継者の育成は、ほんとうに難しいですね。

生き残りをかけた挑戦

井上　今後、どれくらいの水準の籃胎漆器を、どういう人につないでゆくのか。今まさに分岐点に立たされています。それで、私ももう歳ですし、新しいアイディアを、うちの柿本佳子に色々考えてもらっているんです。

狩野　柿本さんは、本物の籃胎漆器を残したいという思いから、別府で竹を編む技術から勉強なさったそうですね。

井上　ええ、うちでだけじゃなくて、他所の竹を編む技術も学びたいと言って。別府は昔から竹の技術が残っていますから。苦労した甲斐があって、なかなか立派に編めるようになりました。柿本はＩＴスキルも持っていますので、うちの店のホームページも、彼女が全部作りました。

柿本佳子氏作の竹籠を前に、対談する井上正道氏（右）と狩野啓子氏

狩野　そうですか。では、柿本さんに経営上の試みをうかがいましょうか。

柿本　はい。昔の優秀な職人さんの技術で、引き継ぐことができなかったものが既に沢山あります。そうしたものを復活したいとは思いますが、費用的にも、時間的にも、なかなか難しい。また現在は新型コロナの流行もあって、経営自体が疲弊していますので、まずは、会社の存続を考えることで精一杯です。

狩野　そういう意味では、ほんとうに今、岐路に立たされているんですね。

柿本　ですから、高度な技術を凝らした商品と、世の中に受け入れてもらえる商品とを、分けて考えるべきだと思っています。新商品のアイディアはたくさんあるんですが、それをかたちにする時間的余裕がなかなかなくて。

狩野　実現したアイディアのひとつが、この東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムを入れたお皿なんですね。

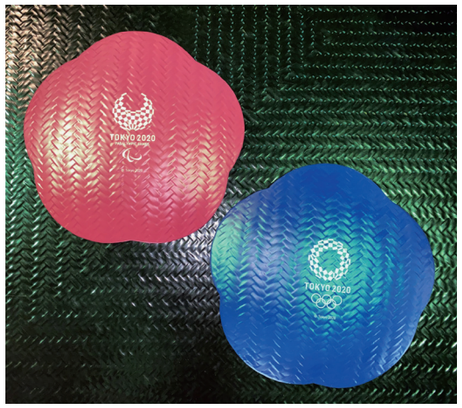
柿本　はい。これは、オリンピックという一大イベントに乗っかって、オリンピックの組織委員会が、日本の伝統工芸品を公式ライセンス商品として世界に広く紹介しようという初めての取り組みですから、当社は福岡県では一番最初に手を挙げて商品化の運びとなりました。

狩野　反響はどうでしたか。

柿本　おかげさまで、予想をはるかに越える売り上げがありました。およそ四百点ぐらいは売れました。寝るひまもないほど大変でしたけれども、成功だったのかなと思っています。

狩野　すごいですね。色は紅と青の二色があるんですね。梅の花をかたどったかわいい形ですね。このほかに、新しい試みはありますか。

柿本　クラウドファウンディングとか、いろいろ挑戦してみたいと思っているんです。



東京2020公式ライセンス商品・籃胎漆器梅型皿

しかしそれ以前に、高齢化がとても進んで後継者が育っていないという課題が。その改善策を考えていた矢先に、新型コロナウイルスによる大幅な売上減少。その対応で精一杯だったわけです。結局、後継者問題は解決できませんでした。それでこれからは、そうした結果を受けてどうすべきなのか。再出発です。そういう意味で分岐点に立たされているんです。籃胎漆器製作の工程数はあまりに多く、しかも機械化できない手仕事ばかりです。また一つの品が完成するためには三か月以上の時間を要します。効率よく製作するには、最低でも職人二十人は必要ですが、現状は五名です。残念ながら、非常に厳しい状況です。

完成した籃胎漆器を吟味する井上氏と柿本氏

狩野　なるほど。しかし、柿本さんのように、苦境に立ち向かって奮闘している方がいらっしゃるということを知っただけでも、お話をうかがったかいがありました。

井上　私の力が及ばないところを、柿本に工夫してもらって、ありがたく思っています。何とか籃胎漆器を次世代へ繋いでいきたいと思っています。

狩野　本日はお忙しいなか、長時間にわたって、ありがとうございました。

井上・柿本　こちらこそ、ありがとうございました。（了）

（令和四年二月二十四日、井上らんたい漆器店頭にて）

日本製籃胎漆器
井上らんたい漆器
福岡県久留米市小頭町六‐二三
〇九四二‐三九‐五四五四
https://www.inouerantai.jp

伝統工芸の国・筑後　第五号

井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話を聴く（三）

久留米大学
KURUME UNIVERSITY

久留米大学文化財保存科学研究部会
〒839-8502　福岡県久留米市御井町1635
http://kurumebunkazai.jp/
令和5年3月10日発行

印刷：城島印刷株式会社
〒810-0012　福岡市中央区白金2丁目9番6号